

「小学校につながる確かな学びの基礎を培う幼児教育」



園長室だより

城南学園幼稚園 園長 太田友子 令和5年9月1日



二学期が始まりました！
— 実りの秋にまっぐら！ —

さて、一年の中でいちばん長い学期、二学期が始まりました。運動会や作品展、宿泊行事、クリスマス会など、行事が続きますが、一つ一つの経験が子どもたちの「実り」となるよう、子どもと共に取り組んでいきます。



保護者の皆さまには、子どもたちが「ご機嫌さん」で登園できるよう、体調管理にはご協力をお願いいたします。

「城南なつまつり」 — 子どもも大人も集う場 —

夏休みの8月26日(土)4年ぶりに盛大に開催されました。保護者の皆さまをはじめ、卒園生や未就園児も一緒に参加でき、楽しさや喜びは倍増しました。

今年の模擬店は9か所ありましたが、これらすべて保護者会の手作りです。(これまでの役員の作品も使っていただいています)どれも心のこもった温かい作品であることは皆さまにも



直ぐにお分かりいただけたことでしょう。これらの準備には、クラス委員の皆さまにもご協力いただきながら進めてこられました。また、当日の模擬店の運営や準備・後片付けなどにも、保護者の皆さまからもお手伝いをいただきました。

さらに、大阪城南女子短期大学からは、学生によるハンドベル演奏や手遊び、最後にはハンドベルの体験コーナーをしていただき、内容豊かな「なつまつり」となりました。制限リサイクルや絵本リサイクルという、SDGsの取り組みもできました。

さて、このような「子ども」を真ん中にした活動は、自ずと大人同士がつながり、明るく元気になるものですね。改めて実感・納得しました。

東上会長をはじめ保護者会の皆さま、本当にお疲れさまでした。二学期も宜しく願いいたします。



共に意識して取り組みましょう！

無意識なうちに、子どもたちに大きな影響を与える存在の私たち。家庭や園の生活の中で、私たちが意識して取り組むべく大切なこととは何でしょう。今回は、言葉について考えてみたいと思います。

「絶対語感」について

— 育むのは身近な家族と先生の役目 —

子どもの教育では、心を育むということがしきりにいわれますが、しかし、いったいどうしたら豊かな心が育つのかについては、必ずしもはっきりしていません。

幼い頃から、良いこと、望ましいこと、普通のことを繰り返し、繰り返し躰け、刷り込んでいくと、自然に習慣ができていっていきます。そうした習慣の中から、にじみ出るように生まれてくるのが心です。心がはじめにあるのではなく、習慣の結果、生まれるもののようなのです。もし、良くない習慣をつければ、良くない心が芽生えることとなります。良いことを習慣化したときはじめて、望ましい心が育まれるのです。

では、何を習慣化すれば良いのか。言うまでもなく、まず、言葉です。刷り込みによって習慣化され、ほとんどの無意識化された言葉が、おのずと心になっていくのです。かりに、子どもの心が荒んでいるとすれば、それは乳幼児から幼児期にかけての、言葉の躰や刷り込みが足りなかったことが一因と考えられます。はじめの言葉の教育は、けっしておろそかにできません。

絶対語感とは、ことばを使う全ての人が、無意識に持っている言葉の規範といえます。文法、発音、語彙、調子、アクセントなど全て、この絶対語感によって決定されています。

—略—

絶対語感とは、ひとりひとりの人の中に存在する言葉の体系、システム、原理です。人が言葉を習得する時には、さまざまな表現を聞いて覚えますが、それでもなお、あらゆる言葉、全ての言葉に接することは不可能です。

ところが、いったん言葉が習得されて、絶対語感ができると、いままで聴いたこともない言葉であっても、理解できたり、使ったりすることができるようになります。絶対語感が形づくられてしまうと、自分で新しい言語表現を生み出すことができます。

絶対語感とは、いわば、ひとりひとりに固有の「ことばのルール」ということもできます。そのルールは、ほぼその人の一生にわたって、少なくともかなりの長い期間、変わることはありません。その人だけがもつ「ことばの個性」です。

良い言葉、正しい言葉、美しい言葉によって絶対語感が作り上げられれば、子どもは一生の宝物を与えられたようなものである。それは、周りの話し言葉によるのである。

(言語学者 外山滋比古 著「わが子に伝える『絶対語感』より抜粋)